や医史学研究者のみならず、一般の方々にも興味深く読んで戴けるものと思う。

（斎藤　仁男）

〔永吉の眼科病院　一九九〇年　A五判　一三六頁〕

## 矢数道明著『漢方治療百話第七集』

本書の著者は、人も知る日本漢方医学界の最長老であり、北里研・附属東洋医学総合研究所名誉所長をはじめとして東洋医学及び医史学関係の多くの要職にあり、斯界の指導者中万人に認められる第一人者でもある。

昭和初年に、漢方医学が衰退の極にあったとき、大塚敬節、木村長久、清水藤太郎等との共著として『漢方診療の実際』を著して南山堂から発行した。時に昭和十六年十月、この書こそ、漢方医学を、現代医学の知見に合せて解説した書物の嚆矢となった。

以来著者は、多くの著書を著すと共に、種々なる漢方医学復興の為の運動を起して、現在のような東洋医学普及の基を礎いたのである。

本書が、第七集となっているのは、昭和三十五年に、『臨床三十年漢方治療百話第一集』を著して以来、五年毎に続篇を著作して今日に至ったが故である。

本七集は、昭和六十年に第六集を発行したあとの五年間に、著者が著述した論文、総説、随筆その他の総てを、前集と同様に編集したものであるが、序文の中では、五年間のメモ迄が細大漏らさず認められている。その綿密且正確なことは、とてものことに凡人のよく真似のできるところではない。

自序に、昭和六十年から六十四年・平成元年に至る間の各年度毎の、漢方界の行事と著者とのかかわりを、総べて記録しているのがそれである。

本文は、第一編治療篇、第二編論説篇、第三編随筆篇、第四編叢談篇、そして附録に分類されている。

治療篇は、更に頭痛・片頭痛・メニエール病、眼・耳・口・歯・咽、喘息・気管支炎・気管支拡張症、心臓疾患、神経性疾患、胃腸疾患、皮膚病一束、婦人科疾患、肝臓・膵臓・腎臓・膀胱・胆嚢・高血圧、リウマチ・痛風・腰痛・膝関節症、その他に区分され、合計一二六症例が記載され、そのあとに質疑応答（治療関係）「日本医事新報より」が二題追記されている。

記載された症例は何れも、臨床上の難症である。従って、漢方医療を、臨床の実際について習得しようとする人達にとって、この上ない参考資料となろう。

論説篇は、主に漢方々剤の運用などの解説で、九篇にわたっている。

随筆篇は、折々の記録や、著者と関わりの深かった人達への思い出と追憶で、著者の人柄のしのばれる名文集である。

叢談篇は、多くの漢方先哲に関連のある考証の論文や、漢方の近代史等四五篇に及ぶ記載であり、何れも興味深い内容で、筆者などは、読み始めるとつい時の経つのを忘れた。

本書は、臨床六十年との副題がある通り、著者が六十年の歳月を、漢方ひとすじに過した歴史の濃縮を見る思いがする。正にそれは、表紙の黄金色が象徴しているようでもある。

新刊紹介と共に、異例ながら、著者六十年の業績に、感謝と祝意を表する次第である。

（山田　光胤）

〔医道の日本社　一九九〇年　七五六頁　定価八、五〇〇円〕

河瀬正晴著

『輸血の歴史――人類と血液のかかわり――』

本書の著者、河瀬正晴氏は姫路赤十字血液センターに製剤課長として勤務するかたわら、多くの著書を発表し、日本医史学会会員でもある篤学の士である。一九八九年には「AIDS '78～'88 切手で綴るエイズ年表」を発表し、時宜を得た出版として注目されたことは御存知の方も多いと思う。今回、同氏はその専門的知識を生かして『輸血の歴史――人類と血液のかかわり――』を出版したので御紹介したい。

本書は一言で言うならば、医学の歴史を人類と血液のかかわりという面から光を当てたハンディーな年表と言うことが出来よう。

著者は輸血の歴史を五つの時代に分けている。第一は「輸血学の先史時代」で人類が血液を神秘なもの、神聖なものと崇め、その故に多くの非科学的な民間療法が行われた時代で十七世紀の初めまで続いた。やがてこの時代はハーヴィーの血液循環の発見にはじまる第二の時代、「輸血学の模索の時代」と続き、それ迄飲用されていた血液を血管へ「輸血」する方法が考え出され、動物の血液を含め多種の輸血が試みられるようになった。一方「瀉血療法」が広く行われ、瀉血により流された血液は戦争によって流された血液より多いと著者は書いている。次いでランドシュタイナーによる血液型の発見にはじまる第三の時代、「真の科学的輸血時代のあけぼの」がスタートし、輸血法は格段の進歩を遂げる様になった。又関連科学の発展に伴って抗凝固剤も開発され保存血液の輸血が可能となり、輸血副作用の本態の解明も進んで、ここに人類ははじめて輸血の恩恵を受けるようになった。一九三六年にはシカゴで世界最初の血液銀行が設立され第四の時代、「輸血学の発展と輸血検査法の確立の時代」に到達する。ここで著者はその専門知識を駆使して成分輸血、分画製剤更に輸血に関係した検査法の進歩を詳しく年表としてまとめている。輸血の重要性が益々認識される一方、輸血を介しての血清肝炎の流行は大きな社会問題となり、ここに売血の禁止、献血による血液の確保が時代の要請となった。年表は一九四九年、時の連合軍総司令部が安全な輸血対策を指示し、これに応えて一九五二年日赤中央病院内に血液銀行が開設されたことまで細かく記して当時の社会の動きを伝えている。最後に著者は現代を第五の時代、「輸血学反省の時代」と規定し、エイズをはじめとする新しい輸血感染症の発生は輸血の乱用に対する警鐘であると断じ、「二十一世紀に向けて正